**近代日本の宗教における身心変容技法と霊的暴力**

**――皇道禅とその系譜――**

日本宗教学会第七十七回学術大会＠大谷大学

パネル　身心変容技法と霊的暴力――負の感情処理のワザの考究

2018年９月９日　上智大学大学院実践宗教学研究科・島薗進

（１）**皇道仏教と皇道禅**

**皇道仏教とは何か**

オウム真理教事件以前の日本における霊的暴力の目立った事例というと仏教と戦争、禅と戦争というテーマが思い起こされる。ここではとりあえず近代日本に限定し、とくにアジア太平洋戦争期に力点を置いて考えることとしたい。「皇道禅」とよばれたものを手掛かりにしたいのだが、その前に「皇道仏教」について述べておこう。

新野和暢氏の『皇道仏教と大陸布教――十五年戦争期の宗教と国家』（社会評論社、2014年）は「皇道仏教」についての概観を提示してくれている。それは仏教諸宗派で日中戦争が始まる時期（193年）前後から用いられるようになり、太平洋戦争期には諸教団で支配的、あるいは優位に位置する思想となっていった。

皇道仏教以前にも戦争を遂行する国家の論理を仏教が肯定するという思想構造が見られた。しかし、日中戦争以後に見られる戦争肯定の論は、国策を肯定していくあり方に加えて、無条件に天皇へ帰依する思想が見られる。それが「皇道仏教」である（83ページ）。たとえば、浄土宗では1938年に「天皇と阿弥陀仏との同一化」が完成したという。1941年に安西覚承という学者はこう述べていた。

天皇に帰一し奉る信と、業務として行為する念仏とを実践する教徒に於て、阿弥陀仏も浄土も究極に於て皇国的理念に帰一すべきことは理の当然である。（『皇道仏教と大陸布教』144ページ）

**皇道禅がとくに注目される理由**

このように伝統仏教各宗派で戦争に随順する教えが説かれ、そのなかで皇道仏教的な言説が広く流布されるようになるのだが、なかでも「皇道禅」が注目されることが多かった。それにはそれなりの理由があったと思われる。この報告では、皇道禅についての従来の考察に学びながら、皇道禅に先行する「禅と戦争」に関わる思想や実践形態を探り、皇道禅に強い関心が寄せられる理由を考えていきたい。

「皇道禅」が注目されたわかりやすい理由の一つは、この問題について論述した有力な書物が刊行されてきたことである。まず念頭に浮かぶのは、市川白玄『日本ファシズム化の宗教』（エヌエス出版会、1975年、『市川白玄著作集　第四巻　宗教と国家』法蔵館、1993年、にも収録）とブライアン・ヴィクトリア『禅と戦争――禅は戦争に協力したか』（光人社、2001年、原著、1996年）である。どちらも皇道禅についての立ち入った叙述と鋭い分析を含む著作であり、多くの読者を得、今も読まれ続けている。この両著でともに比較的詳しく紹介されているのが、若い軍人であった杉本五郎の遺著、『大義』（1938年）である。この『大義』が戦時中に及ぼした影響の大きさが、皇道禅に注目が集まるもう一つの理由にもなっている。

新野和暢『皇道仏教と大陸布教』も『大義』についてかなりの紙数をさいてその影響の大きさに触れているが、発行部数は135部だったという。私が所持しているのは、1938年に刊行された「普及版」と1943年に刊行された「小形版」であり、前者には長文の山崎益州「杉本五郎を語る」が付され、後者の末尾には「大義会」への入会申込書がついている。2018年の今は「大義会」はないが、ウェブサイトを見ると「大義研究会」という会が存在している。

**（２）杉本五郎と『大義』**

**戦争末期に『大義』を読んだ青少年**

市川白玄は文芸評論家の奥野健男（1926-97）の「軍神杉本五郎の誕生――『大義』と戦争末期の若者」（『中央公論・歴史と人物』1973年8月特集号）という文章の一節を引いている。

太平洋戦争の戦局が次第に悪化して来た、昭和十八年、十九年頃、中学生を中心とした若者の間で、杉本五郎の『大義』が、熱狂的に読まれはじめた。……どこからともなく、口コミ……『大義』と読んで見ろ。『大義』はすごいぞ。『大義』こそ真の尊王の書だ、という熱ぽいささやきが中学生の間に、たちまち拡がって行った。……ぼくの通っていた麻布中学にも、昭和十八年、『大義』を輪読し、『大義』の精神を実践するための、「竹心会」という学生サークルがうまれ、やがて学校当局を動かし、校友会の正式のサークルになった。麻布中学は、私立でキリスト教的であり、校風は伝統的に自由で、戦争になってもゲートルを巻いたり、胸に名札をつけたり、軍人流に挙手の礼をするなどの強制は、いちばん遅い学校であった。また予科練などへの教師の強制的勧誘も行われなかった。（『日本ファシズム化の宗教』77ページ）

　奥野は『大義』研究会はほとんどすべての中学校にできたのではないかと推測している。この『大義』を読んで感動して予科練に入った人物を主人公とする小説がある。城山三郎（1927―2007）の『大義の末に』（1959年）である。体育教師に進められて『大義』を読み、感動して予科練に進んだ主人公の「柿見」は、予科練に行くのに反対の父に『大義』を読ませようとしたこともあった。しかし、予科練では事故で友だちを失い、尊敬できない教員に『大義』をもったこぶしで殴られるなどのひどい経験もした。そんななかでも『大義』の言葉が支えとなった。

　　キリストを仰ぎ、釈迦を尊ぶのをやめよ、万古、天皇を仰げ。

天皇に身を奉ずるの喜び、なべての者に許さることなし。その栄を喜び、捨身殉忠、悠久の大義に生くるべし。

皇国に生れし幸い、皇道に殉ずるもなお及び難し。子々孫々に至るまで、身命を重ねて天皇に帰一し奉れ……。（『大義の末に』（新潮文庫版、24ページ）

　しかし、主人公が感銘を受けた皇道の理念と尊敬できない教員に代表される指導層、とりわけ日本軍の倫理的頽廃は切り離すことができるものなのか。『大義の末に』はこのような問いを投げかけている。

　戦争を生き延びて学業に戻った「柿見」にとって、戦後の生活は何か本来的なものを欠いているあやしいものと感じられる。学生らが天皇制について議論するのを聞いていても、自分には入っていけないものを感じる。「かつて柿見たちをとらえた『大義』の圧倒的な感動、その重量感」の記憶と戦っている論者はいなかった。あの重量感、衝迫感をまともに意識すれば、当分は口もきけないというのが、柿見の気持であった。

**杉本五郎の経歴と『大義』**

　奥野や城山の記憶は、杉本五郎の『大義』が戦争末期に若者に与えた衝迫をよく伝えている。では、これほどまでに多くの若者に読まれ、その多くの者の心を揺り動かした『大義』とはどのような書物か。

著者の杉本五郎は1900年、広島県安佐郡三篠町にうまれ、1921年陸軍士官学校を、23年には陸軍戸山学校を卒業し、1931年には大尉に昇進し中隊長となる。日中戦争勃発から間もない37年7月に動員下令を受け中国に向かい、同年九月に山西省で戦死し中佐となっている。この陸軍将校、杉本は1919年に東京の白山道場で平松に参じてから、動員下令を受けるまで18年間、参禅を続けた。広島では仏通寺の山崎益州の指導を受けた。

　杉本は36年に二・二六事件を起こした青年将校が共鳴していた陸軍の皇道派には批判的だったことが『大義』の内容からわかる。市川白玄は『大義』に題辞を寄せた建川美次、小磯国昭がともに統制派であることも指摘し、杉本は統制派の影響を受けていたと見ている。「杉本の『大義』が、陸軍大将林銑十郎の「祭政一致」内閣のを先取りしたものであったことは、不思議ではない」と市川は評している（82ページ）。『大義』は二・二六事件に衝撃を受けたことが執筆の一つの動機だったと思われ、事件後に『大義』の諸章を書き始め、16章まで書いたところで中国に向かうことになった。これを「児孫並に後世青年への遺言書」としてまとめたが、その後戦死するまでの一ヶ月ほどの間にさらに四章を書き足し、全体は20章となった。

**天皇は絶対、自己は無の自覚**

　「小形版」は巻頭に出征直前と戦死3日前の遺影に続いて、「戦死直前の絶筆」が掲げられている。「汝我を見んと要せば　尊皇に生きよ／尊皇精神のある処　常に我在り　（遺品従軍手帖より）」。目次に続いて「緒言」がある（5−6ページ）。その冒頭は、「吾児孫の以て依るべき大道を直指す。名利何んするものぞ。地位何物ぞ、断じて名聞利欲の奴となる勿れ。／士道、義より大なるはなく、義は、君臣を以て最大となす。出処進退総べて　大義を本とせよ」と始められている。神聖な語である「大義」の前は一字開けてある。

「緒言」の結びの後には「父五郎」とあり、「正殿　外　兄弟一統」と宛先が書かれている。「孝たらんとせば、大義に透徹せよ」とあるように、まずは息子の「正」に向けて語りかけた遺言であることを示している。そして、「大義に透徹せよ」とあって、そのために禅があり、また楠木正成（「楠公」）というモデルがあることも記されている。

大義に透徹せんと要せば、須く先づ深く禅教に入つて我執を去れ。若し根器堪へずんば、他の宗乗に依れ。戒むらくは宗域に止まつて奴となる勿れ。唯々我執を去るを専要とす。

次に願はくは、必死以て　大義擁護の後嗣を造れ。而して其は汝子孫に求むるを最良とし、縁なきも大乗根器の大士ならば次第とす。一箇忠烈に死して、後世をして憤起せしむるは止むを得ざるの下策と知れ。宜しく大乗的忠の権化、楠子を範とせよ。

**（３）『大義』における皇道と禅**

**ひたすら天皇に帰一せよ**

　以下、全20章のうちのいくつかを紹介する。第一章「天皇」は全体の主旨が凝縮されたような内容になっている。

天皇は　天照大御神と同一身にましまし、宇宙最高の唯一神、宇宙統治の最高神。国憲・国法・宗教・道徳・学問・芸術乃至凡百の諸道悉皆　天皇に帰一せしむるための方便門なり。即ち　天皇は絶対にましまし、自己は無なりの自覚に到らしむるもの、諸道諸学の最大の使命なり。無なるが故に、宇宙悉く　天皇の顕現にして、大にしては三十三天、下奈落の極底を貫き、横に盡十方に亘る姿となり、小にしては、森羅万象　天皇の御姿ならざるはなく、垣根にく虫の音も、そよと吹く春の小風も皆　天皇の顕現ならざるなし。釈迦を信じ、「キリスト」を仰ぎ、孔子を尊ぶの迂愚を止めよ。宇宙唯一神、最高の真理具現者　天皇を仰信せよ。萬古　天皇を仰げ。（9−10ページ）

　天皇と自己とが対置され、それは絶対と無の関係とされる。「天皇の御前には自己は無なり」と悟ることが要諦となる。そのことを示す「大楠公」の歌が引かれる。

　　身のために君を思ふは二心　君のためには身をも思はじ

　この章の結びは、「唯々身心を捨て果て丶、更に何をも望むことなく、ひたすらに　天皇に帰一せよ」とある（11ページ）。

**「無」に至る道**

　第二章「道徳」は「日本人の道徳」が主題だ。それは教育勅語に集約され、さらに「天壌無窮の皇運扶翼」が核心だ。そして、「個人道徳の完成」は自己は「無」だと自覚し、天皇のために死ぬことである。その覚悟がもてれば、日々の生活がすべて天皇の作用（「皇作皇業」）となる。

天皇の御為めに死すること、是れ即ち道徳完成なり。此の理を換言すれば、　天皇の御前には自己は「無」なりとの自覚なり。「無」なるが故に億兆は一体なり。　天皇と同心一体なるが故に、吾々の日々の生活行為は悉く　皇作皇業となる。是れ日本人の道徳生活なり。（13ページ）

　第三章「「無」の自覚到達の大道」はわずか九行と短い。「無」に至る道とは何か。「「我」を捨てる」とは何か。宗教・教育・芸術・武道・文学、すべてそのための手段であり、「共通の根本道は唯一つ「人境不二」の道是れなり」。

換言すれば、境其物に成り切る境に没入一体化する蕪雑純一となること是れなり。時に日に月に此の訓練を重ねたる時、遂に人境共に無き無一物の境、否、無一物も亦なき絶対無の当体に到達すべし。（14ページ）

　ここまでは2018年の現在でも、ビジネスマン向け生き方本として通用しそうな修行の目標を掲げているように見える。だが、最後に引かれる句はこれを「忠」と「孝」のこととして述べたものだ。

　　真忠は忠を忘る、念々是れ忠なるが故に。／真孝は孝を忘る、念々是れ孝なるが故に。

**（４）『大義』における禅の位置**

**山崎益州と澤木興道**

　以上、杉本五郎の『大義』を紹介してきたが、この杉本の思想は広島の臨済宗・仏通寺の禅僧、山崎益州に導かれたものであった。杉本は山崎のもとで9年間参禅した。『大義』の1938年版（普及版）には、山崎益州の「杉本五郎を語る」が100ページにわたって付されており、書き出し部分に、「私がある時の講演で「日本人の信仰は天皇陛下中心の信仰である」と云ふたところが、杉本さんは大変共鳴した」と語られている。そして、杉本の禅の修行のあり方が絶賛されている。

市川白玄は『禅学研究』32号（1939年11月）に掲載された山崎の「尊王と禅」という論文から引いている――「万世一系の我が国は、世界無比の国体にして……森羅万象は、天皇の御姿ならざるはなく　天皇の顕現ならざるはなし。宇宙は神の顕現にして、即ち、天皇道である。」（『日本ファシズム下の宗教』91ページ）。また、山崎は『大法輪』1944年5月号の「敵愾心の興揚と禅」では、「脚下を照顧しつつ自己を究明し、大禅定中に天皇に帰一し奉り、一挙手一投足、唯今唯今に尊皇に生き生活に具現するは、禅者の体当たり本分にして、随処に主となる活禅なり」と述べている。（同前、92ページ）

　著名な曹洞宗の禅者である澤木興道（1880−1965）も杉本の『大義』を褒め、自らの著作に援用していることを新野は示している。澤木は『観音経提唱』（1944年）の冒頭に「四弘誓願」を掲げているが、それは以下のようになっている。

　　衆生無辺誓願度／朝敵無尽誓願断／法門無量誓願学／皇道無上誓願成

　この第二句と第四句は元来は「煩悩無尽誓願断」、「仏道無上誓願成」であるはずだが、「煩悩」のが「朝敵」に、「仏道」が「皇道」に入れ替わって、皇道風になっている。これは杉本の『大義』第十七章「神社」の末尾にあるものを引いたものだ。そして澤木は以下のように解説している。

……日本の国体、詰り「惟神の道」といふものは絶対なもので、天壌無窮で、八紘一宇で、実にこれはもう大したものだ。これは大したことだといふことが日本人には分かつてをる。分からんものはない。さういふ意味から仏道無上誓願成は皇道無上誓願成と言つてよい。／まことにこの度の戦争は皇道を世界一杯に拡げることである。この日本の皇道、即ち仏道をアジアはおろか、全世界に遠慮なく弘めねばならぬ。我々はこの道によつて三民主義を破り、民主主義を破り、自由主義をやぶらねばならぬ。これが我々日本国民なのである。（『観音経提唱』153−154ページ）

　新野はこれについて、「このように、仏教を「皇道」と同一の思想として捉えるあり方が「皇道仏教」の基本的な特徴と言える」と論じている（『皇道仏教と大陸布教』97ページ）。

**『大義』における禅の位置**

『大義』においては、仏教や禅が皇道に飲み込まれ、皇道に従属するものとなっている。絶対的な信仰の対象は天皇であり国体であり皇国である。だが、そのような信仰が真に深い、本来的なものとなるには「己事究明」を経て、自己が無と化し、行持鍛錬を通して全生活が皇道に即したものにならなくてはならない。己自身を問い、そこで見出されたものによって全生活を統制し、その自己理解・世界理解にそった生き方を貫くということである。戦死直前の絶筆、「汝我を見んと要せば　尊皇に生きよ／尊皇精神のある処　常に我在り」はそのわかりやすい表現だ。この点で『大義』において仏教と禅の役割は大きく、欠くべからざる役割を果たしている。

皇道はそれ自身では、自己を見つめ、現実の全体を統一的に捉える思想的資源をもっていない。また、組織的な修行や規範体系をもっておらず。個々人の生活全般にわたる実践を統合していく道具立てもそろっていない。『大義』では、仏教と禅がそのような思想的実践的全体性を提供している。要するに全生活を統合するに足る思想的基軸が提供され、救済宗教としての包括性が整えられている。それによって、キリスト教や儒教、また西洋の哲学思想などと同様に、実存を支える何かがあると感じられるのだ。城山三郎の主人公（柿見）の心に捨てきれないものとして残った『大義』の衝迫は、『大義』のそうした側面と切り離せないものだろう。

修行を深め、『大義』に結晶する思索を練っていた時期の杉本の生活には、人の敬意を誘うある種の人間性が備わっていたようであり、それは今述べてきたようなつきつめた宗教倫理的一貫性と関わりがあるだろう。「名利何んするものぞ、地位何物ぞ、断じて名聞利欲の奴となる勿れ」というような言葉はその表れのひとつである。市川白玄は奥野健男の言葉を借りて、以下のように述べている。

中央への出世コースをとらず、上官から陸軍大学へゆくことをすすめられたが、「自分は中隊長なるがゆえに、直接兵隊教育をすることができる。今の地位が私の気持に一番よくかなっている。これ以上の地位につきたくはない。」といって応じなかった。中隊長をもって自分の死場所とさだめ、自分の中隊長を「死の中隊」とよんでいた。「部下思いであることは、出征してからも妻への手紙に、貧窮の兵士の家庭への及ばずながらの援助や心づかいにもあらわれている。また母想い子供想いで、酒好きな洒脱な、そして何よりも人を疑うことを知らぬ純粋無垢の性格の持主であったらしい。食いものにも着るものにも金銭にも無関心な、天衣無縫の、まことに貧乏軍人らしい軍人であったようた。」（奥野健男）（『日本ファシズム化の宗教』81ページ）

　そのような廉潔さを保ちつつ、死が避けられない兵士たちを統率する中隊長として、その現実を受け入れた上で、自分なりの倫理的思想を身近な者たちに遺そうとしたことに感銘さえ受けるかもしれない。

**主観的な純粋さと歴史的現実**

　だが、そのような宗教倫理的一貫性は、皇道がもつ暴力性や攻撃性、また「殉皇」とよばれるように死を美化して個々人の生命を軽んじるような特徴を和らげるものではなかった。いや、むしろそうした特徴を強化することにもなった。絶対的な目的を疑わないことは、疑うことを許さないことにも通じ、それが倫理的頽廃をももたらす。『大義』をよんで予科練に入る道を選んだ『大義の末に』の主人公は、『大義』の皇道禅が日本軍の生命軽視や倫理的頽廃と切り離せないものであることも忘れることはできなかったはずだ。

　市川白玄の総括的な批評は次のとおりである。

山崎・杉本の皇道禅は、敗戦の思想史的意義を反省する貴重な資料である。皇道禅になにかみるべきことがあるとすれば、それは禅の見性・悟道を、日本の総力戦という歴史的現実のなかに生かそうとする、意思と努力であった。その意思と努力とは、当初から足場と方向をまちがえたために、主観主義の公害を内外に拡散することになった。負の功績をあげるならば無私、無我、三昧ないし純粋、誠実、献身といった実質・価値とみられるものが、人間的社会的諸関係のなかで、回収不能の惨禍をもたらしたという事実によって、動機論的な倫理性をもつ宗教実践の世界が、冷厳な審判に直面する機会を準備したということである。世界と人間の垂直の次元にかかわる宗教、世界の歴史的・社会的な地平を越える仏法が、世界の水平軸をかたちづくる政治的な権力とイデオロギー、王法の力の論理と倫理のまえに、どんなに無力であるかを、その無力の自己欺瞞において、実証したということである。（75―76ページ）

　だが、これは総力戦体制のもとでだけ生まれた宗教性、倫理性だったのだろうか。

**（５）禅・皇道・戦争**

**皇道論と仏教の持ち分の違い**

　近代日本で禅が皇道や国家神道・皇崇敬と結びつき、戦争に積極的に関わっていく姿勢の形成に寄与した例として杉本五郎の『大義』について見てきた。そこでは皇道論的な信念と禅への強い関心が共存し支え合っている。杉本五郎について、市川白玄は「廃仏毀釈」や「宗教奉還論」に類する論もあり、禅などの宗派の超越という点では「こんにちの神社本庁の政治・宗教思想と同じ類である」とも述べている（『日本ファシズム化の宗教』84ページ）。とはいえ、禅か皇道か、禅か国家神道・天皇崇敬か、そのどちらが優位にあり、他の要素は従属的かと問うことはできる。

　すぐに分ることは、皇道論や国家神道・天皇崇敬が国家の神聖な目的に関わる集合的な次元での信念であるのに対して、仏教、この場合禅は個々人の主体性を支える、個人的な次元での信念であることだ。そして皇道論と禅という、この両者が共存しているということは、それぞれに集合的次元、個人的次元という持ち分があるということである。皇道論や国家神道・天皇崇敬は、個人の主体性を支えるという点ではリソースに欠けている。そこで、個人の主体性を支える信念のレベルでは仏教に、この場合は禅に補ってもらう必要があったということができる。

　他方、仏教の場合は、集合的・社会的な次元での信念が欠けているわけではない。たとえば、仏教理念に基づく世界平和を目指す信念も、仏教的な理念が国家的次元で機能することを目指す信念もある。ある時期の国柱会や創価学会はそのような信念をもっていた。宮沢賢治（1896−1933）が「農民芸術概論綱要」を書いたときもそうだった。だが、皇道論と合体する場合には、集合的・社会的な次元での信念を皇道論に委ねるため、他の集合的信念の可能性を排除して、皇道論とうまく組み合うような個人的信念を強調していくことになる。日蓮系の仏教の信仰をもつ場合、仏教が優位に立つ集合的信念と皇道論や国家神道・天皇崇敬の間に葛藤が生じる可能性が高い。これは日蓮仏教においては、個人的な救済信仰の側面とともに国家・国民・人類の救いに関わる信仰の側面が並存しているからである。集合的救済や社会倫理的な信念の要素が濃厚という点で、近代の日蓮仏教はきわだっていた（拙著『日本仏教の社会倫理』岩波書店、2013年）。

　これに対して、近代における浄土真宗や禅宗の場合、集合的な目標に関わるような信念が目立たず、個人的な信念の側面に限定されたり、国家優位の言説に従属する傾向があった（中島岳志『親鸞と日本主義』新潮社、2017年）。そして、真宗や禅宗のそうした信念体系のあり方が、皇道論や国家神道・天皇崇敬と結びつくとき、皇道論や国家神道・天皇崇敬が求めるものに適合的な方向への変形が加わったと見ることができる。どちらも、「自己を無にすること」が強調されていくのは注目すべきところだろう。皇道論や国家神道・天皇崇敬と「自己を無にすること」は相性がよいようである。

**おわりに**

　市川白玄『日本ファシズム下の宗教』やブライアン・ヴィクトリア『禅と戦争』は皇道禅、あるいは尊皇思想と禅の結びつきについての重要な先駆的業績である。この報告は市川やヴィクトリアに学びながら、皇道論や国家神道・天皇崇敬と禅がどのように合体していくのかを捉えるための手順を考えてきた。

多くの若者たちに熱狂的に迎えられた杉本五郎の『大義』はアジア太平洋戦争末期における皇道禅の威力をよく表すものだった。そこから時代を遡るようにして、皇道論や国家神道・天皇崇敬と禅が結びつく精神系譜をたどっていくと、山岡鉄舟や乃木希典に至る。禅僧や禅仏教教団の側からよりも、皇道論や国家神道・天皇崇敬と禅の結合によって自らを支えようとした在家の人々、とりわけ軍人や活動家に重きを置いて考えていくと、禅仏教のある側面が際立つことになる。

皇道論や国家神道・天皇崇敬と仏教全般の結びつきも念頭に置いておく必要がある。皇道仏教となると日蓮宗や浄土真宗も大きな役割を果たしたと言えるだろう。だが、皇道論と仏教の結びつきが日蓮宗と禅と浄土真宗では異なる。その相違につき、この報告では禅に特有のパターンに注目してきた。

ここまで述べてきて、近代日本における禅と戦争、仏教と戦争について考えなくてはいけないことがきわめて多く、私のこの報告はたいへん小さな試みにすぎない。今後、こうした問題領域での考察が進展していくことを願っている。

**参考文献**

市川白玄『日本ファシズム化の宗教』エヌエス出版会、1975年

島薗進『日本人の死生観を読む』朝日新聞出版、2012年

　同　『日本仏教の社会倫理』岩波書店、2013年

城山三郎『大義の末に』新潮社、1975年、初刊、1959年

杉本五郎『大義（普及版）』平凡社、1938年

同　　『大義（小型版）』平凡社、1943年

中島岳志『親鸞と日本主義』新潮社、2017年

新野和暢『皇道仏教と大陸布教――十五年戦争期の宗教と国家』社会評論社、2014年

ブライアン・ヴィクトリア『禅と戦争――禅は戦争に協力したか』光人社、2001年、原著、1996年

**付記**

　なお。この報告は、「禅・皇道・戦争――皇道禅を導き出したもの――」と題して、『別冊サンガジャパン　禅』（2019年２月刊）に掲載予定の論考の一部を用いている。そこでは、相沢三郎（1935年に統制派の永田鉄山を殺害した陸軍将校）、井上日召、乃木希典、山岡鉄舟なども取り上げ、在家の軍人やアクティヴィストが禅に親しみを深める例を杉本五郎から過去へ遡っていき、明治の「禅と武士道」にまでたどっている。